北海道高等教育研究所ニューズレター

第10号

発行日　2019年2月25日

発行：北海道高等教育研究所

〒060-0001　札幌市中央区北1条西10丁目１－１１原田ビル 北海道私立大学教職員組合連合内
TEL:011-261-3820　FAX:011-272-8186
E-mail：doshikyoso@ybb.ne.jp　http://jinken-net.org/heri/

もくじ

・北海道高等教育研究所・調査研究報告　北海道高等教育研究所　理事　寺本　千名夫　・・・・・ 1
・2018第3回事務局会議報告　北海道高等教育研究所　事務局長　市川　治　・・・・・・・15

調査研究報告

最近の稚内北星学園大学の取組みについて

―現地での斉藤学長からのヒアリング（2018年9月5日）を中心に―

北海道高等教育研究所　理事　寺本　千名夫

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　昨年11月以降の稚内北星学園大学の取組みに関する斉藤学長の報告
1.「地（知）の拠点整備事業」＝COC最終年度を迎えて
2．COC事業の参加校への中間的な事業評価と4年目のまとめ
3．宗谷地域研究所・鉄路プロジェクトの現在
4．ネパール／サハリン
5．大学改革政策の継続性と今後の展開
Ⅲ　大学施設・地域の見学
1．大学施設
2．地域の見学

Ⅰ　はじめに

北海道高等教育研究所では、昨年11月、稚内北星学園大学の斉藤吉広学長をお招きして、「稚内北星学園大学と稚内・宗谷」というテーマで報告をいただいた。報告は、１．地域がつくった大学、２．学生が地域で学んで育つ、３．地域研究のハブになる、４．地域の資源とニーズを生かして、の順で展開された。１．では、大学小史、学科構成、稚内市の人的、財政的な支援、奨学金などについて、２．では、文科省「地（知）の拠点整備事業」＝大学ＣＯＣ事業（注１）を中心とした、学内の取組み状況、課題（注2）等について、３．では、「宗谷地域研究所」の立ち上げ、同研究所の最初の鉄路プロジェクトについて、関連自治体（１市４町２村）との連絡・協働関係（包括連携協定）等について、４．では、地域人材、地元産業界、地域教育などとの連携（幼保小中高大連携等）、地域資源（豊富温泉、稚内珪藻土など）の利

用・連携等について、であった（注3）。

今回の調査は、その報告に引き続くもので、現地稚内市で、大学の様々な取り組み、地域の概況などについて具体的に勉強させていただこうというものであった。調査は、全国私立大学教育研究集会（９月1～３日、於北星学園大学）の翌朝、札幌出発でスタートした。参加者は、当研究所からは姉崎代表、市川副代表・事務局長、寺本、小松事務局員の４名、東京から、野中明治大学教授、手塚さん、山崎さんの３名、計７名の参加であった。稚内までは、斉藤学長自らが手作りされた『旅のしおり』（注4）を広げての移動となった。

その後、北海道高等教育研究所では、11月2日に公開研究会を設け、稚内北星学園大学の米津直希先生を講師としてお迎えし、研究会を開催している。その報告内容が『北海道高等教育研究所ニューズレター』第９号所収の米津直希「地域と大学をつくる―地域唯一の私立大学としてのチャレンジ」である。厳しい条件の中で努力された貴重な実践記録―特に、地域の小中学生の学力向上のためのプロジェクトの実践―である。ぜひご参照していただければと思う次第である。

注1：一口で言えば、「地（知）の拠点整備事業」＝大学ＣＯＣ事業とは、文科省が、地域振興を念頭に置いた、教育・研究・地域貢献を進める大学を選定し、以後5年間にわたって支援（「年間最大5,300万円（H26年度募集分、初年度」）を継続し、地域コミュニティの中核的存在足りえるよう機能強化する事業である。2014年度には、全国から237件の応募があり7月に、その中から25件が選定された。道内では、稚内北星学園大学１校が選定された。選定時の事業名は「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」、連携自治体は稚内市と利尻町となっている。ＣＯＣは、“Center Of Community”の意味である。（参考：稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.1、2015年3月31日付）ちなみに。2013年度には、小樽商科大学【事業名は地域と共創する北海道経済活性化モデルと人材育成、連携自治体は、小樽市、倶知安町、ニセコ町、札幌市、北海道（後志総合振興局）】と札幌市立大学【事業名はウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成「学び舎」事業、連携自治体は札幌市】とが選定されている。

注2：稚内北星学園大学では、スタート時点では、この事業を、①教育支援（近隣の小中学生の学習支援）、②まちなかラボ（中心市街地の活性化の支援、そのために中央商店街の空き店舗に「まちラボ」【「まちなかメディアラボ」】を設置）、③観光支援（稚内市内観光の情報発信、観光ガイドアプリ等の研究、開発等）、④学生ＣＯＣ（学生参加のための支援策）、⑤わくわくメディアラボ（学生がグループで学習する環境の整備）、という５つの事業（その運営組織として各支援室を設置）として取り組んでいる。（参考：前掲誌）その後、議論の深まりとともに、ＣＯＣ事業の柱立てを「地域教育」、「まちなか振興」、「地域観光」の三つに絞ってきているように思われる。（稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.9、2018年1月13日付）

注3：この斉藤学長の講演の詳しい紹介は、『北海道高等教育研究所ニューズレター第7号』（2018年3月21日発行）所収の、北海道高等教育研究所理事　光本滋氏の論稿『稚内北星学園大学と稚内（市）・宗谷との関わり方について』を参照されたい。

注4：『旅のしおり』は、移動日である9月4日の札幌～稚内（日本海側のコース）の見どころ・寄り所―宗谷に入ってから―についての写真と紹介文、翌５日の稚内～宗谷岬間の見どころ・寄り所についての写真と紹介文、がまとめられたもので、Ａ4で20頁もある力作で

ある。一同、恐縮した次第である。

Ⅱ　昨年11月以降の稚内北星学園大学の取組みに関する斉藤学長の説明

以下、斉藤学長の説明に入っていくことになるが、あらかじめお断りしておく必要があるのは、整理の都合で、お話の順序は若干変更させていただいたことである。さらに、斉藤学長は報告要旨の目次構成として、「学生の活躍」と「地域との連携の広がり」とを区別されておられたが、内容を詰めていくと、この２つの問題の分離は難しいことが分かる。チャリティイベント「サンタ・ラン」への参加、「わっかないコーヒーフェスティバル（ＷＣＦ）2018」の開催などは、『ＣＯＣ新聞』にならって後者の中に含めた。また、理解を深める意味で、いただいた地元の新聞記事、『ＣＯＣ新聞』によって、説明の内容をできるだけ具体的に理解できるよう補足を加えさせていただいた。そのことによって、原稿が長くなってしまった。この点については、最初にお詫び申し上げておきたい。

さらに、本章の「２．ＣＯＣ事業の参加校への中間的な事業評価と4年目のまとめ」は、斉藤学長の報告には含まれていないものである。にもかかわらず、ここに含めてしまったのは、積極的に取り組まれてきたＣＯＣ事業の取組みが、客観的にどのような評価を受けているのかという点を紹介したかったからである。１．の補足なのであるが、膨らんでしまい、しかもこの箇所が一番すわりがよいので、このような構成にしたものである。ご理解いただきたいものである。

１．ＣＯＣ最終年度を迎えて

＊学生の活躍・映像

まず、学生の皆さんが全力で取り組み、制作した、多くの映像が高く評価されていることが指摘される。2018年6月には、同大学の学生16人と豊富温泉の老舗旅館である「川島旅館」が制作した、同町ＰＲドラマ「エゾカンゾウの咲くまちへ」が今年度の総務省の「地域発デジタルコンテンツ」大臣奨励賞を受賞している。ドラマは、観光スポットの紹介、各話10分程度からなる5話の物語となっている。監督は伊藤良平君（4年生）が務め、酪農家青年として山岸純樹君（４年生）も出演している。北海道からは唯一の受賞であり、しかも、同大学の同賞受賞は３年連続という快挙である。（『北海道新聞』朝刊、2018年6月13日付）

また７月には、北海道映像コンクールのデジタルコンテンツ部門において、稚内市教育委員会の作品「いのち短し～電話交換手九人の乙女の悲劇～」（制作は稚内北星学園大学）が、また、学生部門（専門学校・短大・大学）において、稚内北星学園大学「地域の医療は、地域が守る。」が、それぞれ最優秀賞に選ばれ、11月に開かれる全国大会「全映協グランプリ」に出品されることになっている。稚内北星学園大学の作品は、授業の一環として制作されたもので、医師不足に悩む市立病院の現状と窮状を知って動き出した市民の取り組みを描いたものである。監督は、3年生の袴田君である。（『北海道新聞』朝刊、2018年7月13日付）

8月26日には、日本最北端学生映像作品上映会（ＮＰＯ法人映像コミュニティ・ムーブユー・稚内北星学園大学主催）が開催され、稚内北星学園大学は、第1部「あの戦争を忘れない」では、「ここで降りたがために、今がある」―横綱大鵬、三船遭難事件―、第2部「少し前の稚内を忘れない」では、現在では廃止された、稚内公園ロープウェイ、稚内・利尻礼文航空路が修められている。（『稚内プレス』、2018年8月14日付）

【補足】以上が、昨年11月以降にメディアによって報道されたものであるが、学生たちの映像制作活動は、ＣＯＣ事業が始まってから、より一層積極的に展開されている。2014年には『温泉街に、

あかりをつけて』（豊富温泉が舞台）、2015年には『感動がひとを動かす～市民第九合唱団の軌跡～』（稚内市の市民音楽活動「第九合唱団」の活動）と、いずれも「地方の時代」映像祭で奨励賞を受賞している。また、授業の一環として、樺太と太平洋戦争を題材に4人の学生が製作していたドキュメンタリー『私たちは、【カラフト】を知らない。』が完成している。2014年10月から1年以上かけて、樺太からの引揚者の方々を取材し、戦後70年の節目にあたる2015年にサハリンに渡り取材したものである。（稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.3、2016年1月18日付）

その後、『温泉街に、あかりをつけて』が総務省地域デジタルコンテンツの大臣奨励賞、『感動がひとを動かす～市民第九合唱団の軌跡～』が北海道映像コンテストで総合通信局賞、『私たちは、【カラフト】を知らない。』が全映協グランプリの文部科学大臣賞を受賞している。（稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.7、2017年3月3日付）

＊学生の活躍・外国人向け観光地図作製

稚内北星学園大学の留学生であるカテリーナ・マールコワさんが稚内市内を訪れる外国人向け観光地図を作製した。彼女は、ロシア・モスクワ南部の出身で、2014年9月に同大学に入学、ロシア語、日本語、英語に通じている。2017年4月からは、稚内市サハリン課で非常勤職員として勤務している。彼女が作成した観光地図は、同大学へ入学してからの体験に基づいたもので、第一に交通手段に関すること、第二に観光名所について、が主な内容となっている。観光地図はＡ3版、表面が宗谷岬に向かうバスの時刻表や主要な観光地、Wi-Fiスポット、トイレなどをロシア語で表記、裏面は各観光地（豊富温泉も含む）の魅力をロシア語と英語で紹介している。（『北海道新聞』朝刊、2018年8月30日付）

＊学生の活躍・学習指導

8月9日から3日間、豊富町教育委員会主催で、「学びの教室サマーチャレンジ」が開催され、教職を目指す稚内北星学園大学の学生10人が参加している。学生たちが、同町の小中学生に算数や数学を教え、また、フロアカーリングなどを通じて交流を楽しむという企画である。同教育委員会とは、平成27年度から夏休みと冬休みに、小・中学生の算数・数学の基礎的事項の定着を図ることを目的として、「学びの教室」を推進してきた。午前中は小学生、午後は中学生の時間とし、大学生作成の問題、子供たちからの課題などを素材として、楽しく学習が進んでいる。子供たちの学習が深まると同時に、教職を目指している大学生にとっても教え方を学べるということで非常に好評である。（『北海道通信４』、2018年8月20日付）

【補足】この分野も、ＣＯＣ事業が始まってから、非常に活発になってきている。学生たちが、2015年度前期には、市内4小学校の『放課後学力グングン塾』（稚内市教委主催）で指導助手を務め、後期には毎週火曜日午後3時半から5時まで『まちラボ無料塾』で、ボランティアで講師を務めている。

稚内市以外では、2014年には利尻町、2015年夏には豊富町、2016年1月から豊富町の小中学生54人が参加した地域教育支援活動「ウィンター・チャレンジ」（豊富町教委主催）にボランティア参加している。猿払村とはインターネットを利用して、小学生を対象に遠隔学習支援を行っている。（稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.1、2015年3月31日付、同紙Vol.3、2016年1月18日付、同紙Vol.7、2017年3月3日付）（注５）

注５：特に以上の点に関しては、前掲、米津論稿「地域と大学をつくる―地域唯一の私立大学としてのチャレンジ」『北海道高等教育研究所ニューズレター』第９号、を参照していただきたい。

＊学生の活躍・特産品の活用

2018年2月には、稚内北星学園大学の学生が、稚内市の特産品である稚内珪藻土（稚内層珪質頁岩）コンブを使った手作りの塗り壁材で、市内中央商店街にある同大学地域交流スペース（「まちなかメディアラボ」・通称まちラボ）の内装の一区画を塗装している。そもそもは、同大学の藤木教授が企画したもので、その指導の下、2年生約20人が取り組んだものである。学生たちは、珪藻土を採掘現場から、コンブを漁師さんから譲り受け、珪藻土の粉状化、コンブや牧草の配合、消石灰との混合の各種作業に従事し、そして最後はまちラボの塗装まで、約半年の時間、労力をかけて実現したものである。（『北海道新聞』朝刊、2018年2月24日付）

＊学生の活躍・学生によるＣＯＣ事業の活動報告

2017年11月には、稚内北星学園大学において第7回ＣＯＣ事業地域活動報告会が開催された。地域教育支援室では、情報メディア学部渋谷久教授と学生2人が「数学を学ぶ楽しさと教える楽しさのあるマス・フェアの取り組み」（豊富中での実践を事例に）をテーマに発表。以下、まちなか振興支援室、地域観光支援室と続いた。（『日刊宗谷』、2017年11月23日付）

2018年2月のＣＯＣ事業地域活動報告会では、学生が稚内市の子供の貧困問題をテーマにした調査を踏まえて、子供たちの現状や市内の病院などと連携した稚内市の支援体制などを紹介している。（『稚内プレス』、2018年3月1日付）

【補足】学生によるＣＯＣ事業の活動は、地域教育支援室、まちなか振興支援室など、担当の教員からの指導に導かれてという側面が強いが、自主的な活動―問題意識、調べ方、まとめ方―の側面が強い場合には、大学本館1階にある「わくほくメディアラボ」（通称わくラボ）が重要な役割を果たしているとのことである（注6）。「わくラボ」は、学生がグループで調査テーマ、そのやり方、まとめ方などについて議論できる空間であり、しかもここにはそのような学習支援、のみならず大学の学習全般にわたっての疑問、問題点の解決を支援する専門家（学習コンシェルジェ）、シュウ特任助教（中国人女性）がいて、いつでも相談に応じている。こういうことも、学生が報告会などで積極的に発表できる素地となっているようである。

注6：「わくほく」は、稚内北星学園大学の略称とのことである。

＊地域との連携の広がり・チャリティイベント「サンタ・ランin WAKKANAI」への参加

「サンタ・ラン」は、サンタクロース姿で街を練り歩き、親元を離れて暮らしている子供たちに、後日プレゼントを贈る行事のことである。稚内市での試みは、今年で2年目となる。2017年2月9日には、稚内北星学園大学の学生などで作る実行委員会が市民へ呼びかけ、小学生から70歳代の方々まで、約130人もの人がサンタクロース姿で稚内市の中心部を練り歩いた。プレゼントは、12日、宗谷ファミリーホームなどに届けられた。（『北海道新聞』朝刊、2017年12月10日付）

【補足】初めての企画・実行された昨年は、短い周知期間にもかかわらず、市内各所から130名もの参加があり、後日、市立稚内病院小児科病棟、エンジェルボイスにプレゼントを渡している。

＊地域との連携の広がり・「わっかないコーヒーフェスティバル（ＷＣＦ）2018」の開催

「わっかないコーヒーフェスティバル（ＷＣＦ）2018」は、2月10日に開催されている。ＷＣＦは今年で3回目となり、市内全域28店舗もの喫茶店が参加するまでになっている。稚内市では江戸時代からコーヒーが飲まれていたという記録が残っており、稚内北星学園大学の学生がそういう歴史を大事にして、フェスティバルを通じて街を賑やかにできればという思いで、実行委員会を立ち上げたものである。（『稚内プレス』、2018年2月10日付）

【補足】最初のＷＣＦは、2016年に開催されている。この年は、先生や先輩に応援してもらった面があったとはいえ、1年生7人だけで実行委員会を組織し、100万円規模のイベントを黒字で終えることができている。学生たちは、協賛企業回りから「まちラボ」での焙煎係まで、普段できない経験することができたことを述べつつ、お客さんたちが多かったこと、喫茶店のマスターたちが喜んでくれたこと、学生だからといって甘えていてはダメだということなどを指摘しつつ、しっかりと地域の中で活動することの意味、その充実感を学んでいる。（稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.4、2016年3月28日付）

＊地域との連携の広がり・まちラボで市民向けの講座の開催

今年の7月から12月にかけては、5回のおもてなしEnglish講座を開催することになっている。稚内市には、年間1万人もの外国人観光客が訪れていることから、おもてなしの気持ちをもって、接することができるようになるためのものである。講師は、まちラボ指導員の田村真理子氏である。（『日刊宗谷』、2018年7月5日付）

また、9月1日の中級エクセル講座の参加者も募集している。学習内容は、主としてエクセルの便利な機能の関数、グラフ作成などである。講師を務めるのは、情報処理検定エクセル1級の資格を持つ稚内北星学園大学の学生である。（『稚内プレス』、2018年8月27日付）

＊地域との連携の広がり・宗谷総合振興局のPR動画制作支援

宗谷総合振興局では、20歳代の若手職員17人で、管内の魅力を伝えるＰＲ動画を作成するための「宗谷動画制作プロジェクト」を立ち上げている。稚内北星学園大学は、同プロジェクトに対して、包括連携協定（注7）に基づき、牧野竜二非常勤講師を中心に、撮影するポイント、どうＰＲするか、をイメージしながらの実践方法の検討、編集機器の協力などについて、全面的な支援を行うことになっている。（『日刊宗谷』、2018年8月8日付）

注7：包括連携協定は、宗谷総合振興局の他、稚内開発建設部、稚内市、豊富町、猿払村と結ばれている。

＊地域との連携の広がり・連携講座の開催

連携講座とは、稚内市教育委員会と稚内北星学園大学との連携講座のことである。第１回は6月23日に稚内北星学園大学で開催され、北大大学院文学研究科の谷本晃久教授（北海道地域史）が、「蝦夷地・北海道の開拓と宗教」というテーマで開拓時代の宗教事情等について、講演している。参加者は、同大の学生と市民合わせて約35人ほどであった。稚内は、最初、北見国に属していたこと（宗谷に行くと樺太が見えることが北見という地名の由来）、紋別市の光源寺では開創期の檀家の信徒に多くのアイヌ人がいたこと（＝和人がアイヌ民族を尊敬していた証拠）等の興味深いこと事柄が述べられている。（『日刊宗谷』、2018年6月27日付、『北海道新聞』朝刊、2018年6月28日付）

２．ＣＯＣ事業への参加校への中間的な事業評価と4年目のまとめ

１）ＣＯＣ事業への参加校に対する中間的な事業評価

2016年度は、5年間のＣＯＣ事業の中間年度であり、ＣＯＣ事業参加校に対して中間的な事業評価が行われた。結果は、「Ａ評価」であり、「中心市街地活性化、観光まちづくりへの学生の貢献度は高く評価できる」、「地域の教育に貢献していくプロジェクトの実施は評価できる」とのコメントをもらっている。

稚内北星学園大学では、このような高い評価に対して、「「宗谷の地に高等教育機関を」という地域の方々の願いで本学園ができて今年で30年目となり、ますます地域の方々とのきずなを強めていきたいと願っています。」と答えている。（以上、稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.7、2017年3月3日付）

２）2017年11月21日開催の第7回「ＣＯＣ地域活動報告会」と第2回「ＣＯＣ地域シンポジウム」

稚内北星学園大学としては、前年度「Ａ評価」を受けたことを踏まえて、自信を持って臨んだ地域活動報告会、地域シンポジウムであったと思われる。前者は、14時30分から稚内北星学園大学において、地域の教育、企業、市議会、行政等の関係者80名が参加して行われている。後者、第2回「ＣＯＣ地域シンポジウム」は、会場を移動して、18時30分から稚内市総合文化センター小ホールで、稚内市及び稚内市教育委員会との共催による「第3回稚内市子どもの貧困対策講演・シンポジウム」として開催されている。参加者は200名を超えている。

①第7回「ＣＯＣ地域活動報告会」

この報告会の目的は、ＣＯＣ事業、学生たちの日頃の地域活動の内容、その中での学びについて、地域の皆さんに報告し、アドバイスや励ましをいただくことにある。稚内北星学園大学の各支援室からの報告は以下のようなものである。

地域教育支援室。澁谷久教授と学生2名から「数学を学ぶ楽しさと教える楽しさがあるマス・フェアの取り組み」について、豊富中での実践例や実際にマス・フェアで教えている学生と生徒それぞれのアンケート結果を発表。

まちなか振興室。学生8人から「平成29年度まちなか調査実習中間報告～稚内中央商店街アクションリサーチ／稚内市子どもの貧困問題関連調査～」について報告がなされた。前者に関しては、稚内中央商店街の情報発信などをするため商店街マップ作りについての取り組みなどを報告している。

地域観光支援室。ピヌス・プラサド・コータム教授から「情報技術を用いた観光や文化の可能性と発展」について、ＩＴ技術を利用して、ＶＲ（仮想現実）」で稚内にいながらリアルタイムでネパール観光ができるような仕組みを開発していきたい、という主旨の報告があった。

また、ポスター発表も2件行われた。一つは、上述の同大学宗谷地域研究所の「鉄路プロジェクト」について。もう一つは、運動部学生による「地域スポーツ文化構築に向けた取り組みとその可能性～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～」である。

同活動報告会は、参加者から非常に好感をもって受け止められている。報告会に来て、「大変よかった」が13、「よかった」が22、「ふつう」が8、「あまりよくなかった」1、「よくなかった」0、というアンケート結果であった。より具体的には、「現在の稚内のまちなかの現状を知るいい機会となった」（20代）、「実際にまちへ出ての調査は大事だと思った。課題は共有されていると思う。」（60代）、「学生を含め、教職員が何を研究しているのか知ることができた。」（20代）、「大学と地域の活動が分かって良かった。」（20代）、「地方大学の在り方として、大学の知恵をいただくことがこの宗谷の地に必要なことと感じた。」（60代）等々。

②「第3回稚内市子どもの貧困対策講演・シンポジウム」＝第2回「ＣＯＣ地域シンポジウム」

ⅰ　市内4地区のプロジェクトチームによる提言

稚内市内の「潮見地区」、「北地区」、「東地区」、「南地区」の4地区から、各地区の子ども貧困対策の取組みが紹介され、大学のある「潮見地区」では稚内北星学園大学の学生達が子供の貧困問題をアピールするポスター、動画の制作を担当している。「北地区」では、「子育てのまち稚内」の様々な子育て支援制度をパンフレットにまとめて紹介（その中で、地元出身者が稚内北星学園大学へ進学する場合、いくつもの支援制度があり、親の負担を軽減できるということを紹介）。「東地区」からは、「子育てファイル」をツールとして、孤立した子育てをさせない取組み、保護者らが考えあう「モニター茶話会」の動画の報告があり、「南地区」からは、幼稚園、小学校、中学校、高校、行政、医療、福祉が連携した「子育てネットワーク」の取り組みと小学生の段階から取り組んでいるキャリア教育に関する報告があった。

ⅱ　講演：松本伊智朗（北海道大学大学院教授）「調査結果に見る子どもの貧困」

松本氏は、昨年度、北海道と北海道大学が実施した「子供の生活実態調査」を踏まえ、上述の稚内市内4地区の取組みが持つ意義を明確にした。

稚内市では、同市の「子育て運動」をベースとした子供の貧困対策は、全国的に見ても、誇れるものとして、自信を持ってきている。（以上、稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.9、2018年1月13日付）

ⅲ　第2回「ＣＯＣ地域シンポジウム」を「第3回稚内市子どもの貧困対策講演・シンポジウム」と重ねたこと

稚内北星学園大学では、黒子に徹しながらも、稚内市が積極的展開している子供の貧困対策事業に対して、問題意識を共有し、私たちもその担い手になりますよ、とのメッセージを行政、市民サイドへアピールしたものとして理解できる。それもＣＯＣ事業の一環ですよ、との認識である。

３）ＣＯＣ事業の一環としての「地域志向教育研究」

もう一つ付け加えると、ＣＯＣ事業には、「地域志向教育研究」として、教員が自分の専門領域を活かして地域の課題に取り組む活動も含まれている。実は、先の第7回「ＣＯＣ地域活動報告会」において報告された、多くの課題が、この「地域志向教育研究」での研究課題に関わるものであった。2017年度に採択された研究課題8件のうち、ポスター発表の「稚内北星学園大学カーリング部」は、「運動部学生による地域のスポーツ文化構築に向けた取り組みとその可能性～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～」、地域教育支援室からの報告は、「三層の教授―学習活動で構成する「マス・フェア」の実践的研究」と、まちなか振興室からの報告は、「稚内北星学園大学地（知）の拠点整備事業は地域住民の意識に変化を与えたか？～活動報告化など参加者アンケート調査結果を用いた一考察～」、地域観光支援室からの報告は、「ＶＲを用いた未来観光（Future　STPF）に関する研究」そのものである。（稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』Vol.10、2018年3月31日付）

この観点から言えば、「宗谷地域研究所」の「“宗谷本線、天北線のヒストリー＆ストーリー”可視化プロジェクト」は、同大学で積極的に推進しており、教員の研究課題にも入っている、「ＩＣＴ利用教育への応用」そのものであるとも言えよう。

教員も、自分の研究課題だけに閉じこもり、学内、地域のことは片手間に、という旧来のスタイルを乗り越え始めている。彼らは、ＣＯＣ事業に取り組むことによって、同事業そのものが目標としている課題、自らの専門領域関わる研究経験を活かしながら、地域の課題にも積極的に取り組むようになってきている。稚内北星学園大学がＣＯＣ事業に取り組んだことの大きな成果だと考えられる。

３．宗谷地域研究所の鉄路プロジェクトの現在

ここからまた、斉藤学長の報告に戻ることになる。

2017年11月の札幌での斉藤学長の報告では、地域研究のハブになることを目指して、1917年5月、学内に「宗谷地域研究所」を立ち上げ、最初に、「“宗谷本線、天北線のヒストリー&ストーリー”可視化プロジェクト」（正式名称）に取り組むことになった、ということであった。今回は、このプロジェクトがどこまで進行しているかについて、お話をいただくことになった。

同プロジェクトのコンセプトは以下のようになっている。

「宗谷本線、天北線の」（４５°Ｎ地域の鉄路の展開を軸にして）

「ヒストリー&ストーリー」（産業、また、暮らしの記録と記憶を）

ヒストリー：事実／変化／意味　　ストーリー：思いで／小説・映画

「可視化プロジェクト」（見える化）する

データを「地図上」に集積　　「見てわかる・楽しい」表現

研究所のNewsletterの発行（主題と副題を見れば、その号の内容がよくわかるので、詳しい紹介は割愛）

第１号　宗谷地研　稚内北星学園大学　宗谷地域研究所　Newsletter　01　2017.9.26
鉄路プロジェクトの始動
沿線の歴史と文化と産業を地図上に可視化します

第２号　宗谷地研　稚内北星学園大学　宗谷地域研究所　Newsletter　02　2017.11.18
幌延町簡易鉄道ツアー体験記
研究所の地域フェロー（共同研究者）を紹介します

第３号　宗谷地研　稚内北星学園大学　宗谷地域研究所　Newsletter　03　2018.7.17
鉄路プロジェクトWebサービスβ版
閲覧とデータ入力の方法を紹介します

以上の宗谷地域研究所のNewsletterを見ていくと、学内フェロー９名の他に学外の有識者９名に「地域フェロー」として参画を依頼している、ということに気が付く。現在、稚内北星学園大学は、情報メディア学部・情報メディア学科という情報系の単科大学になっているので、学内だけでは、歴史、地域経済などに関わる研究者をすべて揃えることは難しいと思われる。そういう意味では、学内に研究所を立ち上げても、運営は難しいだろうと想像される。しかし、宗谷地域研究所では、地域フェローというシステムを工夫して地域有識者を取込んでいくことで、その限界を超えようとしている。これも一つの知恵であろう。

ちなみに、『Newsletter　01』では、稚内歴史・まち研究会会員２名、他に稚内市学芸員、稚内市立図書館司書、稚内開発建設部職員、稚内市内小学校教員、写真家（さいたま市在住）各1名、の方々の職名が挙げられており、『Newsletter　02』では、そのうち４名の方のお名前が挙げられている。

β版システムの構造では、鉄路プロジェクトのソフト面での展開が示されている。

Ａ）Webサービス　　地域で「よってたかって」創るデータベース

・学校教育、社会教育での活用例　会社、先祖、神社仏閣、鉄道遺跡、フォト

・Webサービスの正式版に向けて

・Webサービスの将来

Ｂ）地研アプリ　　線路展開デモや動画・新聞記事データの閲覧

①鉄路ニョキニョキ　　ＯＫ

②人口変遷アニメ　　ＯＫ

③天北線の窓から　　天北線最後の日の映像
④日刊宗谷・交通記事データベース
⑤その他

そして第１回　天北線を語る会が開催されるに至っている。
2018年8月3日　「まちなかメディアラボ」にて

『北海道新聞』では、以上の宗谷地域研究所の取組みを、「鉄道の歴史、思い出ＨＰに」（ＨＰはホームページ）として紹介し、その概要と、７月17日には、「まちなかメディアラボ」で、プロジェクトの報告と入力体験会が行われたことが紹介されている。『北海道新聞』朝刊、2018年8月4日付）

４．ネパール／サハリン

稚内北星学園大学では、ネパール出身のゴータム・ビスヌ・プラサド教授を中心にネパールとの交流を積極的に進めてきており、現在では、ネパール人留学生（研修生も含め）は22名を数え、全学生の20％を占めるまでになっている。

１）稚内ネパール友好協会設立総会が、2018年5月27日、市内キッチン倶楽部・菜好において、市民らとの交流の場を作ろうということで開催されている。会員は留学生を含めて40人程度で発足、会長は前市長の横田耕一氏を選任。横田会長は、「留学生の顔と名前を覚えてもらい、まちで会ったら声をかけるなど交流の場を」、青山滋副市長は、「市民とネパール人の友好の輪を広げ、国際交流を進めてほしい」と述べている。

２）早速、6月16日には、同大学の「まちなかメディアラボ」で、留学生たちが市民に母国の伝統文化を紹介する「ネパール・カルチャー・デー」が開催されている。ネパールの民族楽器の太鼓、笛を用いて宗教音楽「バジャン」の演奏から始まり、民族舞踊の紹介、ネパール語ミニ講座が行われた。

３）8月18日には、稚内北星学園大学において、ネパール国ポカラ市のトリブバン大学プリティビ・ナラヤン校（学生9、431人）との学術交流に関する協定調印式が行われた。同校のチャンドラ・バハドュール　タパキャンパス長と斉藤学長は、ともに、この協定を機に、「新しい関係が築ける」（斉藤学長）、「友好関係、教育関係が深まる」（チャンドラ・バハドュール　タパキャンパス長）ことを期待していることを述べ、協定書に署名している。

稚内北星学園大学とネパールとの交流活動は、上述のように、極めて順調であるが、サハリン（＝ロシア）との交流は、思わしくない状態にある。稚内北星学園大学では、ロシアにいちばん近い大学として、サハリン（＝ロシア）、特に、サハリン国立大学との交流を積極的に進めてきたが、稚内北星学園大学のロシア語教員が札幌大学へ移籍した結果、これまでの交流が中断状態になってしまっている。何とかしたい思いはあるのだが、なかなか難しい状態にあるとのことである。大学としては、ネパールとともに、目の前のロシア・サハリンとの積極的な交流が、そして第2、第3のカテリーナ・マールコワさんの出現が期待されているのだと思われる。

５．大学改革政策の継続性と今後の展開

稚内北星学園大学の財政は厳しい。国からは私学助成（一般補助、特別補助）とＣＯＣ事業の補助金、さらに稚内市からも多額の補助金を受けてやり繰りしている。本学では、今年度ＣＯＣ事業の最終年度にあたっており、その成果の発表を中心にして計画を立てていたにもかかわらず、急な文科省の特別補助金の減額の結果、非常に大きな影響を受けてしまっている（注8）。当初は、ＣＯＣ事業に取り組んでいる場合には、定員割れでも減額はないと聞いていたのだが・・・。財政面では、俗な

言葉で言えば、「ワヤ」状態となっている。

当初、ＣＯＣ事業など文科省の政策に取り組み始めたときには、これこそ「地方創生」という感じでうまく行った側面もあるが、最終的には国の大学政策は、地方私立大学の方を見ていない、「地方切捨て」政策に転換してしまったのではないか、とさえ感じ始めている。私大協の幹部との話し合いでも、国の大学政策は、「官尊民卑」の状態にあるのではないかとの認識は変わらない。

注8：自民党政権のもとで2007年度から定員割れ大学への一般補助金の減額が始まり、さらに安倍政権・文科省は今年度予算の配分において、定員割れ大学に対する補助金減額をさらに強化する方針を打ち出している。減額調整をさらに細分化し、さらなる減額率の引き上げ、特別補助も減額の対象とすることを決定している。「特別補助については、①充足率75％未満、②５か年連続で充足率が減少、③過去５年間の事業活動収支差額がマイナス、④教育の質に係る客観的指標による増減率がマイナス、の４つすべてに該当する場合、一定率を乗じて減額することを決定」している。のみならず、文科省は、「2017年度分の交付額決定において、「圧縮率」に定員充足率による傾斜をかけていたことが発覚」している。結果、定員割れ大学（490校）は、「一律に圧縮した場合の配分額」であれば、約160億円の補助金額だったのが、「定員充足率による「メリハリ調整」をかけた場合の配分額」では約120億円に減額されてしまっている。この減額された分は定員充足大学（383校）に上乗せすることになった。約320億円が約360億円へと増額されたのである。何の説明なしの減額であり、多くの大学から強い批判が上がっている。当然である。定員割れで苦闘している条件不利地にある多くの地方大学の支援策ではなく、それとは真逆の政策である。【以上、全国私立大学教育研究集会（11月1～3日、於北星学園大学）日本私大教連中央執行委員会基調報告『今日の私大問題―現状から提言へ』23頁、参照】。

これまで、大学の自主的な取り組み、ＣＯＣ事業など文科省の施策に応募する形での取組みによって、大学は地域のことに一所懸命取組んできた。そのことによって、実際、確かな手応えも感じてきている。そういうものを、今後の大学の研究教育活動にどのように継承していくかということも重要な課題となってきている。これまでの経験を踏まえて、大学（教員・学生ともに）が地域の諸課題について、地域住民の皆さんと一緒に取り組んでいくことを継続していきたい。学内の教員研究者だけではなく、地域の研究者の皆さんとも一緒に進めつつある宗谷地域研究所の「鉄路プロジェクト」の深化、またＣＯＣ事業などの展開の象徴となってきた、わくほくメディアラボ（通称わくラボ、学生がグループで学習する環境の整備・学習コンセルジェの常駐）とまちなかメディアラボ（通称まちラボ・中心市街地の活性化の支援、そのために中央商店街の空き店舗に設置・メディア表現指導員の常駐）等も、なんとか継続できないかと考えている。

実は、ＣＯＣ事業の成果をこれからの大学の研究教育活動につなぐために、私立大学研究ブランディング事業（注9）に応募していたが、残念ながら、実現していない。

注9：私立大学研究ブランディング事業は、【平成30年度予算額56億円（55億円）】「学長のリーダーシップのもと、大学の特色ある研究を基軸として、全学的な独自色を大きく打ち出す取組を行う私立大学の機能強化を促進する。」もので、二つのタイプに分かれている。　その一つは、地域で輝く大学等への支援の道との副題が付く「タイプＡ【社会展開型】」で、その内容は「地域の経済・社会、雇用、文化の発展や特定の分野の発展・深化に寄与する取組」となっている。今一つは、「イノベーション創出など経済・社会の発展に寄与する大学等への支援」との副題を持つ「タイプＢ【世界展開型】」で、その内容は、「先端的・学際的な研究拠点の整備により、全国的あるいは国際的な経済・社会の発展、科学技術の進展に寄与する取組」となっている。そのどちらかで、各大学の特色化・機能強化の促進を図ることになる。選定方法は、事業体制と事業内容を総合的に審査した結果である。選定されれば、通常、年間2,000～3,000万円が5年間にわ

たって支給される。

しかしながら私立大学研究ブランディング事業に関して、文科省の現職局長が私立大学からの受託収賄罪で逮捕・起訴されており、同省では、汚職事件を受けて調査・検証チームを設置している。2018年8月21日に初会合を実施し、幹部逮捕の舞台となったことを重視し、2018年度は弁護士らの点検のもと慎重に選定を進めることを確認した。2019年度以降については、選定校が2016年度40校、2017年度60校、2018年度50校、合計150校となり、私立大学・短大全体の20%に達したことから、先導的な取組みを支援するという当初の目的は達成したとして、新規の募集を行わないことを決めている。後継事業については検討を進めているようである。

ちなみに、北海道内では、2016年度は選定なし、2017年度は北海道科学大学が選定校となっている。タイプＡで、事業名が「北国生活環境科学拠点～積雪寒冷地域における医社工連携をとおした超高齢社会対応のための技術展開と普及～」、3年間、人文・社会系、理工・情報系、生物・医歯系3分野に関わるもの、となっている。（以上、「文部科学省私立大学研究ブランディング事業」）

また、稚内市からは、資金的にも、人的にも沢山の支援を受けているが、公立化には規模の問題があって困難であると言わざるを得ない。学生数が定員数の半分を超えないと、補助金をカットされるので、定員を縮小してきている。しかし、施設はもともと当初の定員数を前提にして建設されているので、「縮小された」定員を満たしたとしても、実際の財政運営状況の厳しさは変わらないという実態がある。斉藤学長は、このような事態を「小規模の不経済」として理解していると語っている。

報告全体に関しての若干の小括

最北の稚内という街で、大学をつくり、守り続けてこられたことに敬意を表すること以外にない。にもかかわらず、まず、一般補助金、さらには特別補助額も急に減額され、ＣＯＣ事業も完成年度となり、手厚い稚内市の現在の支援もさしあたって一区切り、となる。そういう中で、学生募集状況を見守っていくことになる。来年度はどうなるのだろうか、と。厳しい、の一言である。

稚内北星学園大学の皆さんの一層のご奮闘を祈りつつ、同時に私たち研究所の責務も考えずにはおられない。北海道高等教育研究所は、こういう状況のレポートだけではなくて、問題解決のための政策の提言、また、ささやかではあれ、可能な支援策の模索にも踏み込んでいかなければならない状況にあるのだろうと思う。

Ⅲ　大学施設・地域の見学

大学施設、地域の見学に関しても、斉藤学長自らが案内し、解説してくださった。感謝の言葉以外に見つからない。

１．大学施設

食堂

斉藤学長の報告の後、まずは、腹ごしらえ。夏季休暇中なので、ガランとした食堂でそれぞれ昼食をとる。勝手がわからないので、まごまごしていると、恰幅の良いおばさんがニコニコしながら、「どうしたのさ？」と聞いてくださる。順序についてお伺いすると、食堂のことは何で見聞きなさい、というお顔で、実にテキパキと教えてくださる。お話を聞くと、稚内北星学園大学では、食堂で働いておられるおばさん達も委託先のパートさんではなく、大学職員だとのこと。至極納得した次第。窓の外は、風の冷たそうな原野が広がる。時には、カモシカ氏やキタキツネ氏もおいでになるようである。

ペースがあることは本当にうらやましい、と思った次第。

学習コンセルジュの高シュウ先生にいろいろお話をお伺いしたかったが、時間がなくてできなかった。でも、お目にかかれただけでも良かったと思わなければ、と思った。というのは、同室に稚内北星学園大学『ＣＯＣ新聞』というものがあることに気が付き、「これは必要」と直感的に感じたもので、初対面に関わらず図々しく全号のコピーをお願いした。本稿は、これがなければうまくまとまらないほど重要だった。感謝の一言！

２．地域の見学

地域の見学も斉藤学長自らが案内してくださった。感謝です。

稚内メガソーラー発電所

大学を出て、最初に見えてきたのが、稚内メガソーラー発電所である。ここは、2006年独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）による「大規模太陽光発電系統安定化等実証研究」の研究施設として整備され、2011年をもって研究終了。その後、稚内市に無償譲渡され、現在、北電に売電し、年間1億円の利益を出しているとのことである。施設の概要は、発電所出力：太陽光発電4,990ｋｗ（設備容量：5,020ｋｗ）、蓄電設備：NAS電池1,500ｋｗ、敷地面積約14ha（東京ドーム3個分）、すごいなあ、と感心。新しいエネルギーの時代がすぐそこに来ているという実感が湧いてくる。

宗谷岬・宗谷岬公園

続いて、日本の最北端の宗谷岬へ。残念ながら、お天気がぱっとせず、サハリンは見えなかった。それでも、最北の風情を味わうとするたくさんの観光客がいる。7月9日に戦場カメラマンの石川文洋さんが沖縄を目指してこの宗谷岬を出発した。その日は本当に寒い日だったことを今でも思い出す。その石川さんは、順調に歩き続け、東日本大震災の被害地である岩手県沿岸部、宮城県沿岸部、そして原発被災地である福島県沿岸部を超え、茨城県水戸市から国道6号線（水戸街道）伝いに、東京・日本橋に到達している。今頃は東海道であろう。

宗谷岬の後ろの坂を上りきると宗谷岬公園がある。下から見るとさほど感じないが、公園は結構広く、その一角には、旧海軍望楼があり、その他にたくさんの記念碑が並んでいる。ラ・ベルーズ、平和の碑、祈りの塔、海軍戦没者慰霊碑、宮沢賢治文学碑等目白押しであった。

宗谷岬牧場

宗谷岬公園から独特の景観を持つ宗谷丘陵が始まり、やがて、広大な宗谷岬牧場が見えてくる。その途中で、自動車から降り、雄大な眺めを楽しむ。東側はオホーツク海、西側が日本海、北側が宗谷海峡である。なかなか見ることができない風景である。宗谷岬牧場の牛は黒毛で肉牛専門牧場であることが分かった。酪農研究の専門家（市川さん）は、「ここに乳牛がいればもっと良いのに」と独り言。

白い道

宗谷丘陵のフットパスコースには、実に綺麗な「白い道」があった。白いものを手に取ってみると、想像していた通り、小さく粉砕されたホタテの貝殻であった。ホタテ産地の浜辺には、用済みとなった貝殻が山のように積まれており、このような用い方によってホタテの貝殻を処理するのも一つの方法であろう。旅行者には、白い道は「清楚」そのもののイメージもあって大変好評である。白い道は、宗谷丘陵だけでなく、街中にあっても喜ばれそうである。

濱森辰夫記念講堂

それから学内施設の見学。まずは、濱森辰夫記念講堂である。すぐ眼に付くのは、二階にデンと鎮座するパイプオルガン、こんなところに、という感じで見上げる私たち訪問者に、「そうです、お見知りおきを」とご挨拶をしている感じである。整然と並ぶ昔風の、机、椅子にも懐かしさを感じる。こんな荘厳な場所で、有難いお説教をいただいたら、なんでもうんうんと聞いてしまいそうである。

空いている研究室

教員の方々の研究室が並んでいる一角を通る。その中に、学生の皆さんが使用している研究室（ゼミか、研究会か）があるという。空いているドアにその旨記してある。大学に入学したての頃、高校までの教員室とは違う、教員一人一人が自分の専門文献を揃え、研究しているという研究室という存在、そこの住人である教授、助教授の先生方が、とても偉い人たちのように思えた時代があった。そういう雰囲気を最初から味わえて、うらやましいなあ、と思った次第である。

200人教室

200人も（札幌の大手私大の先生方、「も」ですよ。）入る立派な教室もあった。静かな、とても落ち着いた大きな教室に入ると、ふと、昔の授業前の緊張感が少しだけ出てきて、人間なかなか変われないものなのだ、と思った次第。学長さんは、はにかみながら、「なかなかこの教室を利用する機会が少なくて・・・」と言われる。誰かが街中だったら、と呟いている。確かに、そうだったら学外者の利用もあり、収入増にも結び付くかもしれない。しかし、現実は現実なのだから、どっしり構えて、この大教室が学生で一杯になる日を目標に頑張るしかないな、とお腹の中で呟いた次第。

映像・音声等処理室

情報メディアの取り扱いが専門の大学なので、これに関する施設が沢山ある。放送室もその中の一つであろう。こちらは、文系人間なので、いろんな機器があるのだなあ程度の情けないレベルである。でも、これぐらいの機器、スペースがなければ、いろいろな機関の賞を受けるまで、また、宗谷支庁など他機関からの受託、支援などはできないのだなあ、というぐらいのことは分かる。これらも立派な大学の財産である。

図書館

図書館は開架式のようである（少なくとも図書館に入ってすぐのスペースは）。閉架式になれている自分には、なんとなく使い勝手がよく、有難いような気がする。閉架式での図書の利用は、当たり前のことなのだが、利用図書があらかじめ決まっていなくてはならない。ところが、いろいろ考えあぐねているときには、何がヒントになるかわからないもので、全然関係がないと思っていたものが、役立つことがあるのである。

また、図書館に入ってすぐのスペースに、稚内北星学園大学のＣＯＣ事業に関係する様々な資料が揃えられていることにも気が付いた。これはありがたい、まとめるときはこちらを利用させていただこう、と思った。（まだ、実現していないが）

わくほくメディアラボ（通称わくラボ）

稚内北星学園大学のＣＯＣ事業の展開にとって、重要な部署だと聞いていたので、興味津々という気持ちで入室。何人かで議論できるような配置で机がある。夏季休暇中なので、学生の皆さんは不在だが、通常の利用イメージはわいてくる。私たちの学生時代は、図書館は静かに読書、学習をするところで、友人たちとの議論、会話は、食堂、喫茶店と相場が決まっていたので、学内にこういうス

副港市場・樺太記念館

文字通り第一副港の跡地に開設された、お土産・温泉・食堂を抱えた複合施設であり、結構人出があり、にぎわっていた。二階には、樺太記念館があり、大変勉強になった。全国樺太連盟から稚内市に寄贈された約1,000点もの衣服や写真などが掲示されている。稚内は、サハリン（樺太）との窓口であったことを改めて噛みしめた。今はまだ、「引き揚げ」「悲しみ」のイメージが重くのしかかる。いつの日か、希望に満ちた窓口になるという願いを持ち続けたい。

まちなかメディアラボ（通称まちラボ）

大学のサテライト、「まちなかメディアラボ」（通称まちラボ）である。ロシア語で書かれた看板が並ぶ中央商店街の一角にある。初めて入室するまちラボの様子は、イメージしていた通りであった。中央に会議、学習ができる机・椅子があって、壁にはそれほど大きくない黒板があって、いろいろな講座のポスター類の張り出しがあって、コピー機が置いてあって、「メディア表現指導員」の方のデスクおかれている、こんなイメージであった。

入室して、すぐ指導員の田村さんからお茶を入れていただきながら、沢山の質問に答えていただいた。お話を聞きながら、さすが稚内北星学園大学ＣＯＣ事業の要、まちラボを取り仕切っておられる方なのだと感じ入った次第。

稚内港北防波堤ドーム

北防波堤ドームは樺太（サハリン）が日本領であった第二次世界大戦終了時までの日本と樺太を結ぶ航路のシンボル的存在であった。当時は、1938年には、ドーム内にも線路が敷設され、稚内桟橋駅も設置された。樺太へ向かう乗客は、稚内と樺太・大泊を結ぶ稚泊航路の連絡船に、駅構内を出ることなく乗り込むことができるようになった。北防波堤ドームは、その稚内桟橋駅を高波から守るための防波堤であった。（2001年から北海道遺産）

稚内公園

地域の見学の最後は、稚内公園となった。稚内公園は、稚内市街西側の高台にある47万平方メートルもの大きな公園で、日本海を一望できる高台に位置している。そこには樺太島民慰霊碑（本郷新制作）である「氷雪の門」がある。それは、樺太への望郷の念とそこで亡くなった人達の霊を慰めるために制作されたものだということである。終戦直前に自決した電話局の「九人の乙女の像」もある。終戦時の多くの悲しみがのしかかってくるようである。天気の良い日には、その樺太がはっきりと見える。

皆で、「氷雪の門」と「九人の乙女の像」に頭を下げてから、評判の北海道で一番うまいソフトクリームだと言われたと言う「ゲストハウス氷雪」のおじさんに「1番ではなくて、2番目ぐらいのうまさにしておいた方が売れるのでは」と勝手なことを言いながら、ソフトクリームをコーンに入れてもらった。

３．2018年9月6日午前3時7分　胆振東部地震発生（厚真町震度7）

こうして9月5日は過ぎ、それぞれ帰宅する予定であった6日朝のことである。朝早くから、宿舎である奥田屋ホテルの廊下で人の声がするなあ、と思っていたら、午前3時ごろに地震があったのだという。稚内は震源地から遠くそれほど強い揺れはなかったのでわからなかったのである。しかし、すでに停電となっていた。テレビをはじめ、電気を使用するものはすべてストップ状態で、状況を把握できないのである。

そうしているうちに、山崎さんと野中さんがすでに食料をコンビニで調達していてくださっている

よ、とのご連絡があり、朝ご飯にありつくことができた。「こういう時にはまず食料の確保なのよ」というご判断に敬意を表する以外にない。さらに、手塚さんが手動式の携帯ラジオを持ってきていると聞いて、すごいなあと驚くばかり。北海道の3人は危機管理対策ゼロ、情けなし。

まずは、稚内空港へ行ってみたら、羽田行きが飛んでいるということが分かり、まず、野中さんと山崎さんは北海道脱出。手塚さんは小樽を目指して、市川さん、姉崎さんとご一緒に、信号のない道を南下。小松さんと小生は、小松さんの車で札幌を目指した。途中、まだ開いていたコンビニには食料品はほとんどなく、札幌が近づくにつれて、開いているお店自体がなくなってしまった。札幌の街には明かりがなく、信号がないのでおっかなびっくり、進まざるを得ない。美唄へ帰る交通機関など全滅状態なので、真っ暗な小松さんのお宅にご厄介になった。食べ物は、朝、山崎さん・野中さんからいただいてきたものを食べる以外になし、という状態であった。二人で改めて山崎さんと野中さんの先見の明に、感謝申し上げた次第である。

2018第3回事務局会議報告

去る2019年2月6日に北大において、北海道高等教育研究所の第3回事務局会議（6人参加）を開催したので、報告します。

Ⅰ. 今期・2018年度の総括案について

1. 研究所としての調査研究について

地域づくりと大学教育のありかたの検討を中心に調査研究を進めてきた。

(1)旭川市と旭川大学との取組みの調査検討報告案について―寺本理事・小山代表理事と事務局

公立化の方向についての調査検討結果（一定の方向案）を今年度整理し、報告する。

(2) 稚内北星学園大学等の報告について-第10号に掲載予定

これについては、2月中の発行を行う。また、稚内北星学園大の支援の方法等についても今後考えていく。4月以降に、再度、整理し報告したいと考えている。

(3)そのたの地域調査計画について

函館大と地域の関係については、今年度、取り組み案を検討したが、次年度の課題として検討していくことにした。また、網走の東京農大の取り組みなどを次期に報告してもらう計画を進める。

2.　2019総会、研究会、講演会の開催について

（１）**2019総会について―<u>2019年6月15日を予定</u>**

1)　2018年度総括案について

4月13日の理事会・研究会を開催し、2018年度の総括と2019年度の方針案を提示する。

2) 開催計画案

2019年度総会の日時

2019年6月15日13時半～17時半（その後、懇親会を予定）を第一候補として行う（第二候補としては、6月8日を想定している）。

②場所

報告者を含めて、考えていく。場所の案として、札幌大、北大、公共施設等を考えていく。

（２）研究（集）会（第3回目）

①研究例会について－　2019年4月13日を検討予定

報告として、3国立大学の統合問題や、旭川大の公立化の動きなどを考えている。

光本理事に帯広畜産大の方、姉崎代表理事に北見工大の方の報告者の確認を依頼した。

（小樽商大については、組合の委員長にお願いしたい）

②総会時、2018年度の研究集会を行う（研究会として4回目）。

ここでは、3国立大学の統合問題や、モデル的な地方私大についての報告と討論を行う。

③理事会について―第2回理事・監事・顧問会を4月13日に研究会とともに行う予定で進める。

3.受託事業―2018アンケートの集計・分析予定ー委託済み

①今年も、例年どおり北海道推進協より12万円で委託された。

②2月5日、私大教連の事務所で集計分析方法と印刷についての打合せを行い、進めることになった。

4. ニューズの発行について

①第8号と9号を今期に発行した。

②第10号について一今期中・2月中に発行する。稚内北星学園大学の報告を掲載する。

5.所報について

2018年度の初頭に第1号を発行した。引き続き、2019年度中に第2号を発行していく。この内容例として、この7～8年間の道内私大の事件についての一定の整理や、国立大の統合問題等をテーマに報告する予定である。

また、今年度作成の『所報1号』については、道内大学の図書館等に寄贈する予定で進める。

6.その他

①研究集会については、全大教北海道、北大等との合同で開催したいということで、私大教連のほうで、全大教事務局との話をした。

②私大助成や奨学金の問題も検討していく予定である。

7.決算について

『所報1号』を出したことにより、ほぼ予算どおりの決算になる見込みである。

Ⅱ. 次期の課題と方針

1.課題について

①引き続き研究テーマ、大学と地域の関わり方、公立化の検討

②国立大の統合問題の検討や、私大、特に道内私大・短大のおかれている状況把握のための分析

③国、道などの財政分析、統計の整理

④その他

2.方針について

①課題に沿った研究活動

②テーマに沿った研究会・研究集会（講演会）の開催

③委託調査分析

④その他

3.組織拡大

4.予算